無知、怠慢、欺瞞、罪

ドイツ文学者・エッセイスト　池内　紀

福島第1原発の事故から3カ月が過ぎた。冷静をとりもどした頭で、整理のためにメモをとってみよう。

第1に私たちの無知である。原子力発電の恩恵を受けながら、それがいかなるものかを知らなかった。たとえば原子炉の寿命が40年とされ、その後の廃炉、また使用済み核燃料の処理に莫大な費用と長い歳月を要するということを知らなかった。

第2に私たちの怠慢である。原発の危険、また建設と廃棄に要する巨大な経費を考えれば、決して安い電力でないことは、少数の学者たちがくり返し警告していた。それに耳をかそうとせず、きちんと受けとめて考えるのを怠った。

第3に私たちの欺瞞（ぎまん）である。必ずしも無知だったわけではなく、チェルノブイリやスリーマイル島の事故のことも知っていた。地震大国に原発を五十数基も設置した無謀さも感じていた。絶対安全といわれても、世の中に「絶対」といえるものなど何一つないことをよく承知している。知っていながら知らないふりをし、感じながら自分とは関係ないようにみなしてきた。

あすへの話題

第4に利益のこと。私たちを無知にとどめ、怠慢にさせ、利己主義と自己欺瞞に導いたものがある。無知にとどめておくほうが自分たちに都合がよく、知らないと思いこませることが利益になる。それについても私たちはうすうす感じていたのだが、大勢に従って安楽を享受してきた。

日本人が大きな罪を犯した。とてつもなく地球を汚し、とり返しのつかない荒廃をひき起こした。しかもこの罪は孫子の代まで私たちにつきまとう。罪に目をつぶるのは、とても卑しいことなのだ。

2011.6.15 朝日